

"過剰な著作権"を冷笑 滋賀で「コピーの時代」展

著者	山田 奨治
雑誌名	日本経済新聞
発行年	2004-06-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00006050/

滋賀県立近代美術館（大津市）で「引用と複製」をテーマにした現代美術の展覧会「コピーの時代」が開かれている（9月5日まで）。従来、「コピー」がらみの作品は低く見られがちだったが、今回の展覧会には見所が多い。「日本文化の模倣と創造」などの著書がある山田奨治国際日本文化研究センター助教授に同展を批評してもらった。



山田 奨治
日文研助教授

「コピーの時代」展はシミ・クレショニズム（既存のイメージを利用した表現）を一望できる、質・量ともに特筆すべき展覧会だと思う。滋賀県という一自治体の美術館で、こんな先端的な企画を実現した学芸の力量を、素直にほめたい。

デュシャンやウォーホル、

滋賀で「コピーの時代」展

過剰な著作権を冷笑

この部分は公開に適さないため削除されています。

リキテンシュタインの「古典」的な作品もいい。赤瀬川原平の伝説的な千円札作品や、すっかり第一人者になった森村泰昌の代表作などが一堂に会している。

福田の新作「志村ふくみ《聖堂》を着る」では、美術館に納められ、決して着ることができない着物を、自身に着せてみている。その福田の自画像からは、「紺（かすり）なんてものはね、美術館に掛けて鑑賞するものじゃなくて、普段着にするものなのよ」という声が聞こえてきそう

名作ほんろう 伝統制度煙に

▲福田美蘭 小沢剛▼

とも感じられる。

そうかと思えば、福田は名画のなかに飛び込む体験をもさせてくれる。ベラスケスの「宮廷の侍女」のなかの侍女のひとりや、ボッティチェリの「春」のなかのゼフェロスの視点からみた世界を、大胆に描く。それもただ仮想の世界をみせるだけでなく、みな

だ。

大きくいえばポップアートなのだろうが、福田の作品にはどこかに、わたしと同世代の生活臭が感じられる。ディズニーの子供用プレイマットをそのまま模写して絵にした「◎模写」などがそうだ。わたしとおなじ世代の者が親として子どもに与えてきたおもちゃを、そのまま作品にしてしまうことへの驚き。著作権の帝国ともいえるディズニーへの不敵な挑戦とキャラクターへの愛が福田のなかでアンビバレントに交錯しているこ

どこかユーモラスなのだ。福田は自作に署名をしない。それでもあえて署名をするときには諧謔（かいぎやく）的な意図をあらわにする。シミ・クレショニズムはコピーを武器にしているといっても、自分の作品に署名を入れる作家が少なくない。これは自分のオリジナルだといわんばかりに。しかし福田はあえて署名を入れないことで、作者をかるやかに消そうと試みる。

他の作家の作品も紹介しておこう。小沢剛の「醤油画資料館」は笑える。醤油（しょうゆ）で描くという奇想天外さもさることながら、伝統を作る制度としてのミュージアムという、国民国家論のテーゼが、ここに反すうされている。

はたまた、コンビニの看板から文字を消した中村政人のカラーボード作品には、はたとさせられる。万国共通の色記号が象徴する均質なサービスが、国境を越えて、国家をも解体しつつあることを示唆しているからだ。

この展覧会はパロディー展ではない。しかし、どの作品もシニカルな笑いに満ちている。現代社会の風刺、過剰な著作権への問題提起、わたしたちが生きている世界のシステムを暴く試み——シミ・クレショニズムに深刻なメッセージを読み取ることはたやすい。しかし「コピーの時代」展には、それよりももっとたやすい鑑賞の方法——ひとつひとつの作品にニヤリと微笑（ほほえ）みながらみること——がおすすすめだ。

この部分は公開に適さないため削除されています。